

10/19 Wed.

第656回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.656 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor Laureate  
チェロ  
Cello  
コンサートマスター  
Concertmaster

バルトーク  
BARTÓK

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5  
SYLVAIN CAMBRELING  
アンドレイ・イオニーツァ -p.6  
ANDREI IONIȚĂ  
小森谷 巧  
TAKUMI KOMORIYA

舞踏組曲 [約17分] -p.9  
Dance Suite  
I. Moderato  
II. Allegro molto  
III. Allegro vivace  
IV. Molto tranquillo  
V. Comodo  
VI. Finale: Allegro

ビゼー  
BIZET

交響曲 第1番 ハ長調 [約32分] -p.10  
Symphony No. 1 in C major  
I. Allegro vivo  
II. Adagio  
III. Allegro vivace  
IV. Allegro vivace

[休憩]  
[Intermission]

ダルバヴィ  
DALBAVI

チェロと室内管弦楽のための幻想曲集  
(日本初演) [約15分] -p.11  
Fantaisies pour violoncelle et orchestre de chambre (Japan premiere)  
第1幻想曲-第2幻想曲-第3幻想曲-第4幻想曲-第5幻想曲-第6幻想曲

サン＝サーンス  
SAINT-SAËNS

チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33 [約19分] -p.12  
Cello Concerto No. 1 in A minor, op. 33  
I. Allegro non troppo – II. Allegretto con moto – III. Tempo primo

リゲティ  
LIGETI

ルーマニア協奏曲 [約14分] -p.13  
Concert Românesc  
I. Andantino  
II. Allegro vivace  
III. Adagio ma non troppo  
IV. Molto vivace – Presto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）  
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

10/25 Tue.

第622回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.622 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor Laureate  
ヴァイオリン  
Violin  
三味線  
Shamisen  
コンサートマスター  
Concertmaster

ドビュッシー  
DEBUSSY

一柳 慧  
ICHIYANAGI

[休憩]  
[Intermission]

ドビュッシー  
DEBUSSY

ヴァレーズ  
VARÈSE

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5  
SYLVAIN CAMBRELING  
成田達輝 -p.6  
TATSUKI NARITA  
本條秀慈郎 -p.7  
HIDEJIRO HONJOH  
長原幸太  
KOTA NAGAHARA

遊戯 [約18分] -p.14  
Jeux

ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲  
(世界初演) [約18分] -p.15  
Double Concerto for Violin and Shamisen (World premiere)  
I.  
II.

イベリア (管弦楽のための〈映像〉から) [約20分] -p.16  
Ibéria (from "Images pour orchestre")  
I. 街より道より  
II. 夜の香り  
III. 祭りの朝

アルカナ [約20分] -p.17  
Arcana

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）  
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会  
協力：アフラック生命保険株式会社  
令和4年度（第77回）文化庁芸術祭参加公演

10/29 Sat.

第251回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.251 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/30 Sun.

第251回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.251 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮  
Conductor Laureate  
トランペット  
Trumpet  
コンサートマスター  
Concertmaster

ビゼー  
BIZET

シルヴァン・カンブレラン (桂冠指揮者) -p.5

SYLVAIN CAMBRELING

セリーナ・オット -p.7

SELINA OTT

林 悠介

YUSUKE HAYASHI

〈アルルの女〉第1組曲、第2組曲 [約35分] -p.20

L'Arlésienne Suite 1 and 2

第1組曲

I. 前奏曲

II. メヌエット

III. アダージェット

IV. カリヨン

第2組曲

I. バストラール

II. 間奏曲

III. メヌエット

IV. ファランドール

[休憩]  
[Intermission]

ジョリヴェ  
JOLIVET

トランペット協奏曲 第2番 [約13分] -p.21

Trumpet Concerto No. 2

I. Mesto - Concitato

II. Grave

III. Giocoso

フローラン・シュミット  
FLORENT SCHMITT

バレエ音楽〈サロメの悲劇〉 作品50 [約29分] -p.22

La tragédie de Salomé, op. 50

第1部 前奏曲 - 真珠の踊り

第2部 海の誘惑 - 稲妻の踊り - 恐怖の踊り

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

独立行政法人日本芸術文化振興会

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

指揮

シルヴァン・カンブレラン

(桂冠指揮者)

SYLVAIN CAMBRELING,  
Conductor Laureate

“色彩の魔術師”と巡る  
東欧、フランス、  
現代曲の世界



©読響

色彩豊かな音楽作りで、読響を世界のトップレベルへと導いた名匠カンブレランが、約3年半ぶりに読響の指揮台に帰ってくる。

1948年、フランス・アミアン生まれ。2010年から9年間、読響常任指揮者を務め、古典から現代まで幅広いレパートリーを演奏し、高い評価を得た。17年11月にはメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉を披露し絶賛された。19年4月から桂冠指揮者の任にある。

バーデンバーデン&フライブルクSWR響の首席指揮者、ベルギー王立モネ歌劇場、フランクフルト歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督などを歴任。現在はハンプルク響の首席指揮者、クラングフォルム・ウィーンの名誉首席客演指揮者、ドイツ・マインツのヨハネス・ゲーテンベルク大学指揮科の名誉教授を務めている。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、クリーヴランド管、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管、ウィーン響など、世界の一流オーケストラに客演。また、オペラ指揮者としては、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座、パリ・シャトレ座、ザルツブルク音楽祭、ルール・トリエンナーレなどに数多く出演し、幅広いレパートリーを披露している。録音も数多く、SWR響との《メシアン／管弦楽作品全集》は、一人の指揮者と同一のオーケストラによる世界初の全集として注目され、欧州の主要な音楽賞を総なめにする快挙となった。読響と共演したベルリオーズ〈幻想交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、マーラーの交響曲第9番のCDも発売されている。

10/19  
名曲

10/25  
定期

10/29  
土曜マチネー

10/30  
日曜マチネー

Maestro

10/19  
名曲

Artist



©Nikolaj Lund

チェロ

**アンドレイ・イオニーツァ**

ANDREI IONIȚĂ, Cello

2015年チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、一躍注目を浴びた俊英。ザ・タイムズ紙で「10年に一人の逸材、最もエキサイティングなチェリストの一人」と絶賛され、欧州各地で活躍している。1994年ルーマニア生まれ。ハチャトゥリアン国際コンクール優勝、ミュンヘン国際コンクール第2位など受賞多数。ナガノ、マルヴィッツらの指揮で、ミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、チェコ・フィルなどと共演。23年には、シカゴ響にデビューする。ザルツブルク音楽祭に出演するほか、カーネギー・ホール、ウイグモア・ホールなどでのリサイタルや室内楽も高い評価を得ている。読響とは18年にカンブルランの指揮で共演し好評を博した。



三味線

**本條秀慈郎**

HIDEJIRO HONJOH, Shamisen

演出家・蜷川幸雄や作曲家・一柳慧から絶賛された三味線演奏家。本條秀太郎に古典・現代音楽を師事。桐朋学園短期大学部卒、ACCフェローによりニューヨークへ留学。文化庁文化交流使に任命され世界30公演。また英国ウイグモア・ホールでリサイタルを開催。19年には藤倉大「三味線協奏曲」をNYリンカーンセンターの音楽祭で世界初演。坂本龍一と3度共演し委嘱曲「honj」などを演奏。サントリーホールチェンバーミュージック・ガーデンに邦楽の演奏家としてはじめて出演するなど、活動は多岐にわたる。芸術選奨文部科学大臣新人賞、文化庁芸術祭新人賞、出光音楽賞など受賞多数。22年カリフォルニア大学デイヴィス校とベイツ大学のアーティスト・イン・レジデンスに選出された。

10/25  
定期

Artist

10/25  
定期

Artist

卓越した技術で現代音楽まで幅広いレパートリーを得意とし、熱いパッションを漲らせる実力派。1992年生まれ。パリ国立高等音楽院で学ぶ。2010年ロン・ティボー国際コンクール、12年エリザベート王妃国際コンクールで第2位となり注目を集めた。クリヴィヌ、アルトリヒテル、インキネン、山田和樹らの指揮で、ルクセンブルク・フィル、プラハ響などと共演。21年1月には、ヴァイグレ指揮、読響とハルトマン作品を演奏し絶賛された。ホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞など受賞多数。一柳慧らの作品を初演するなど、現代作品にも意欲的に取り組んでいる。使用楽器は、宗次コレクションから貸与された1711年製のストラディヴァリウス「タルティーニ」。読響とは、2012年の初登場以来、数多く共演。



©Marco Borggreve

ヴァイオリン

**成田達輝**

TATSUKI NARITA, Violin

難関ミュンヘン国際音楽コンクールのトランペット部門で、2018年に女性として初めて優勝し、世界的な注目を浴びる“トランペット界のミューズ”。ウィーン国立音大やカールスルーエ音大などで、ウィーン・フィルのM. ミュールフェルナー、R. フリードリヒらに師事。ビシュコフやオルソップらの指揮で、ベルリン・ドイツ響、ケルンWDR響、ウィーン放送響、マリンスキー劇場管、ハンブルク響などと共演。オルフェオ・レーベルから3枚のCDをリリースし、2021年には「トランペット協奏曲集」がドイツで最も権威ある音楽賞「オーパス・クラシック賞2021」を受賞するなど、いずれも高い評価を得ている。今回が初来日。



©Nancy Horowitz

トランペット

**セリーナ・オット**

SELINA OTT, Trumpet

10/29  
土曜マチネー10/30  
日曜マチネー

Artist

## バルトーク 舞踏組曲

ベラ・バルトーク (1881~1945) は「創造性の抑うつ状態」を経験した音楽家のひとりだ。1923年から26年にかけて、完成作品を世に送り出せなくなった。自作の編曲など、仕事自体は継続していたのだが、どうしても新作を生み出せない。

後から振り返ればその期間が、来る新創作期を準備する矯<sup>きた</sup>めの時期であると分かる。その直前、創造性の大きく膨らんだ時代<sup>とうひ</sup>の掉尾を飾る作品が、管弦楽曲〈舞踏組曲〉である。作曲は1923年。〈4つの管弦楽曲〉(21年)やヴァイオリン・ソナタ第1番(21年)・第2番(22年)と同じ時期の曲だ。

〈中国の不思議な役人〉のピアノスコアを完成させたものの、そのバレエ上演がいつまでたっても実現しない。業を煮やしたバルトークは、〈役人〉の管弦楽曲化の前に、いわば習作として〈4つの管弦楽曲〉と〈舞踏組曲〉とに取り掛かった。後者に関しては、ブダペスト市3区合併50周年記念曲の委嘱があったことも、創作契機のひとつとしている。

作品は6曲からなるが、構成にはいくぶん注意が必要だ。まず、第3・4曲と第5・6曲とはそれぞれ、ひとまとまりと考えられること(その観点からすると全4曲)。次に各曲の間にリトルネロ(間奏曲、以下R)が挟まること。つまり「① R ② R ③④ R ⑤⑥」の形をとる。これは、作曲家の個人様式である「回文形式(ABCBA)」や「ロンド形式(ABACAD)」の発露だ。その形式の中で作曲家は、民俗音楽と同時代音楽とを統合する。

**第1曲** 東洋風・アラブ風舞曲。リトルネロはハンガリー風。**第2曲** ハンガリー風舞曲。リトルネロが続く。**第3曲** 東欧風とアラブ風が混在する舞曲。休みなく次曲へ。**第4曲** 静かな楽想のアラブ風舞曲。リトルネロも静けさを共有。**第5曲** 原始的な舞曲(作曲家の言葉)。終曲への“序奏”。**第6曲** 終曲。各舞曲やリトルネロを回想して作品を閉じる。  
(澤谷夏樹 音楽評論家)

作曲：1923年／初演：1923年11月19日、ブダペスト／演奏時間：約17分

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2(バスクラリネット持替)、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、テナー・ドラム、トライアングル、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、グロッケンシュピール)、ハープ、4手ピアノ、チェレスタ、弦五部

## ビゼー

## 交響曲 第1番 八長調

交響曲八長調は1855年の秋、ジョルジュ・ビゼー（1838～75）17歳のときの作品である。パリ音楽院在学中の作曲で、師グノーの影響が色濃くにじむ。というのもビゼーは、自作の作曲の直前に、師の二長調交響曲を4手ピアノ用に編曲しているからだ。だからといって交響曲八長調に、ビゼーの個性が刻印されていない、というわけではない。事態は正反対で、若書きであるこの曲には、円熟期のビゼーがすでに顔を出している。

第2楽章のオーボエの主題を、のちにオペラ〈真珠採り〉のアリア「僕の女友達」や、劇付随音楽〈アルルの女〉のメヌエットに用いた。また、第4楽章の第1主題はオペラ〈カルメン〉の「前奏曲」、副主題は〈カルメン〉の「子供たちの合唱」とオペラ〈ドン・プロコピオ〉の第1幕とに転用した。

ビゼーの特徴のひとつに「才能のエコロジカルな運用」がある。気に入った曲や楽想は、のちの作品の中でも活かす。もちろん転用に際しては必要な手を加え、工夫をこらす。その点で単なる「コピー・アンド・ペースト」とは一線を画している。ビゼーにとって転用は、個性を活かし切る手段なのだ。交響曲八長調はその元本のひとつである。

**第1楽章** 第1主題の造りにすでに非凡な才能があらわれている。上拍で次々と起き上がり跳躍する分散和音に、下拍で一歩一歩なめらかに進む順次下行が続き、両者の融合体（上拍で起きる順次下行）がその楽句を締める。こうした論理性が作品全体を貫く。

**第2楽章** 前楽章第1主題前段の跳躍モチーフの派生形と、順次進行で上下する音型とを対比する。中間のフガートの主題もその対比を軸としている。

**第3楽章** 民俗音楽風の舞曲楽章。中間部にはバグパイプを模した楽句が登場する。

**第4楽章** 無窮動の第1主題と伸びやかな第2主題を示したのち、展開部では両者を垂直に重ねる。副主題の短短長（タタター）韻律が折々に推進力を加える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1855年／初演：1935年2月26日、バーゼル／演奏時間：約32分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

## ダルバヴィ

## チェロと室内管弦楽のための幻想曲集（日本初演）

マルク＝アンドレ・ダルバヴィ（1961～）はフランスの作曲家。パリ音楽院でコンスタンとブーレーズに学び、現在、母校の管弦楽法の教授を務める。これまでに器楽曲からオペラまで、50ほどの作品を書いている。

〈幻想曲集〉の作曲は2008年（翌年に改訂）。声部の数はふつうの管弦楽曲と変わらないが、独奏チェロを含め、管・弦・打・鍵盤のいずれも1パートひとりの楽器編成をとる。それによりこの作品は、管弦楽曲でもあり室内楽でもあるような、不思議な二面性を具えることとなった。

曲はひと続きに演奏されるが、複数形をとるタイトルの通り、名目上は6つの幻想曲からなる。緩急の異なる6部分を結合することでダルバヴィは、作品の情緒変化に大きなリズムを施した。

オーケストレーションも興味深い。いくつかの楽器が群れをなし同じ動きをする。それぞれ異なる動きの群れが重なりあう。群れの内部、または各群れの間にある音域の高低幅は広い。一方で各群れの音の動き自体は、狭い範囲を行ったり来たりする。群れはそれぞれアンサンブルの規模。全体は室内楽の寄り合いといった趣を持つ。

冒頭、総奏を伴って走り出した独奏チェロが、にわかに減速し“裸”で下行音型を弾く。それを合図に気楽なアンダンテ風の部分に入るが、音符は徐々に細分化していく。

第2幻想曲ではその細分化した音符が、声部の群れの組み合わせを変化させながら“自走”を始める。全声部で下行音型を弾き切って、かなり緩いテンポの第3幻想曲へ。それも束の間、オーケストラの音は細分化する。対照的に独奏チェロは伸びやかな旋律を奏する。

短い第4幻想曲を経て第5幻想曲に入ると、独奏チェロがゆったりとしたテンポでカデンツァ風に“歩み”を進める。“脚の回転”を速くしたのち、もとの“歩み”にいったん回帰。そこから急加速で第6幻想曲に入る。その勢いを保ったまま、下行音型で曲を締める。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2008年（2009年改訂）／初演：2008年12月5日、ニューヨーク／演奏時間：約15分  
楽器編成／フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、打楽器（大太鼓、銅鑼、サスペンデッド・シンバル、ヴィブラフォン、ティンパニ）、ピアノ、チェレスタ、ヴァイオリン3、ヴィオラ2、チェロ、コントラバス、独奏チェロ

## サン＝サーンス

チェロ協奏曲 第1番 イ短調 作品33

18世紀前半にヴィヴァルディが、その後半にはハイドンやボッケリーニがチェロ協奏曲の傑作を残し、この楽器をコンチェルトの主演に足る存在と世に認めさせた。

ところが以後、同ジャンルに優れた作品がなかなか現れない（モーツァルトの1曲が失われたのは重ねがさね残念だ）。この停滞を打破したのは、シューマンのイ短調協奏曲である。冒頭、管弦楽による山なり音型の進行を受けて、緩やかに峰を描くチェロの旋律が続く。この山なりの力動を“かすがい”に全曲を統合する。3つの楽章を途切れなく演奏する点でも統合の度合いは高い。

シューマンがロマン派的チェロ協奏曲の雛形を示して以降、このジャンルは創作面で活況を迎えた。カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）のチェロ協奏曲第1番は、この活況の中心をなす曲のひとつだ。作曲家はこの作品で、シューマンの方向性をいっそう徹底させた。

サン＝サーンスの第1協奏曲は単一楽章制をとる。ただし、その内側は3つの部分に分かれている。各部を楽想のまとまりで示すと「第1部：A」「第2部：B」「第3部：ACA」となるので、全体としては5つの部分（ABACA）からなるロンド形式、ないし（バロック期以来の協奏曲構想原理である）リトルネロ形式のようにも聴こえる。

**第1部** 三連符、短長短（タタータ）の韻律が、上拍から始まる旋律にのって聴き手の耳に届く。これらの特徴を以後の部分も共有する。

**第2部** かたつ 闊達な2拍子からメヌエット風の3拍子へ。第1部の短長短から短長（タター）や長短（タータ）を切り出し、“推進装置”として活用する。

**第3部** 第1部を回想した後、曲は16分音符で疾走し始める。ヴァイオリンによる山型のモチーフを合図に、チェロがのびやかに旋律を奏でる。疾走感を取り戻してからは、三連符や短長短韻律など、全体を統一する要素が改めて登場し、作品のまとまりを強調して曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1872年／初演：1873年1月19日、パリ／演奏時間：約19分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

## リゲティ

## ルーマニア協奏曲

「私がルーマニアの民俗音楽に初めて触れたのは3歳のとき。カルパチア山脈のアルペン・ホルン奏者による演奏でした」

ハンガリー生まれのジェルジ・リゲティ（1923～2006）は第二次世界大戦中、コロジュヴァール（現在のルーマニア北西部クルジュ＝ナポカ）の音楽院で学び、大戦後、ブダペストのリスト音楽院で作曲の勉強を再開した。1949年に学校を卒業してすぐ、民俗音楽の実地調査のためルーマニアを巡る。その成果を十分に吸収した50年、和声、対位法、楽曲分析の教授として母校に赴任し、56年までその地位にあった。

〈ルーマニア協奏曲〉（1951年）はそのころの作品だ。タイトルの通り、作曲家は実地調査で得た民俗音楽に関する知見を、この曲にたっぴりと盛り込んでいる。それだけでなく、3歳のときの体験も同じように、作品に反映させた。

**第1楽章**では、ユニゾンの冒頭が強い印象を聴き手の心に残す。2度下行の繰り返しが民俗音楽風の“身振り”として耳にこだまするからだ。

**第2楽章**は短長長（タター）韻律を推進力とするダンス・ミュージック。第1・2楽章はいずれも、1950年の作品である2台のヴァイオリンのための〈バラードとダンス〉から、音楽を自家転用している。

**第3楽章**はアダージョ。ホルンの呼び交わしに、この作曲家の「三つ子の魂百まで」を見る。リゲティはホルンに、バルブを使わず自然倍音で音を出すよう指示している。その点にもアルペン・ホルンのスタイルが色濃く映る。

**第4楽章**はトランペットの信号吹きで幕を開ける。直後、弦楽のうごめきが始まり、徐々に各パートが合流していく。それが強奏に達した後、民俗舞踊風の音楽が軽快に流れ出す。しばらくすると弦楽のうごめきが戻る。そこに（たとえば、ディニクの〈ひばり〉のような）ロマの音楽が続く。ホルンのエコーを回想し、打ち付けるような総奏で作品にピリオドを打つ。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1951年（1990年代半ばに改訂）／初演：1971年8月21日、ウィスコンシン州フィッシュ・クリーク／演奏時間：約14分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、弦五部

ドビュッシー  
遊戯

1912年6月9日、クロード・ドビュッシー（1862～1918）は、ピアノ版のスコアが完成したばかりの〈春の祭典〉を、その作曲者ストラヴィンスキーと共に連弾している。後にドビュッシーは、「それは美しい悪夢のように私にとりついて離れず、その物凄い印象を再び味わおうと私は虚しく試みています」（笠羽映子訳）と述べているから、相当に鮮烈な体験だったのだろう。

実はちょうどこのころ、ドビュッシー自身も、〈春の祭典〉と同じくロシア・バレエ団のための管弦楽曲の創作に没頭していた。タイトルは〈遊戯〉。テニスコートを舞台にした若者3人の恋の遊戯を描いた、一見たわいないようで、実はなかなかエロチックな含意を含むバレエである。ちなみに、先のエピソードによる先入観かもしれないが、この曲のとりわけ前半には、随所で〈春の祭典〉を思わせる瞬間がある。もちろんすでに大家だったドビュッシーがそう簡単に他人の影響を受けたとは考え難いが最終段階において、ほんの少しだけエキゾチックなスパイスが振りかけられたと想像するのは楽しい。

初演は1913年5月15日、パリのシャンゼリゼ劇場。捉えどころのない音楽だけあって、批評は芳しいものではなかった。加えて2週間後には同じ劇場で〈春の祭典〉初演が大混乱の末怪我人まで出す大スキャンダルを巻き起こしたものだから、〈遊戯〉はすっかり影の薄い存在になってしまったのだ。

しかし、第二次世界大戦後、プーレーズやシュトックハウゼンといった前衛作曲家たちがこぞってこの曲を再評価する。実際、ここでのドビュッシーの筆は、すみずみまで冴えわたっているではないか。わずか18分ほどの中で、転がるテニスボール、そして同じように転がる乙女心という不定形の運動それ自体が、色彩豊かなパレットの上で躍動し、捻じれ、炸裂する。ここでは物語を追うことは重要ではなく、瞬間的な色彩の交替とテンポや拍子の変化に、ただただ圧倒されるのが正しい聴き方であろう。

〈沼野雄司 音楽学〉

作曲：1912～13年／初演：1913年5月15日、パリ、ピエール・モントゥー指揮／演奏時間：約18分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ2、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、シロフォン）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

## 一柳 慧

## ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲（世界初演）

来年、一柳慧は90歳を迎える。しかし、「あたりしさを求めてやまないその姿勢はデビュー当時から全く変わらない。

今回の新作で一柳が試みるのは、なんと洋楽器と邦楽器の二重協奏曲である。ルー・ハリソンにはガムラン楽器とヴァイオリン・チェロのための二重協奏曲があるが、おそらくヴァイオリンと三味線という組み合わせによる協奏曲は過去に存在しないのではなからうか。ただし、単に珍奇な組み合わせを選んだわけではない。1980年代以降の一柳は、西洋と東洋の時空間をいかにして止揚させるかを様々なかたちで模索してきた。とするならば、何よりこの二重協奏曲は、現時点で彼が到達した、この難問にたいする「解答」と見るべきなのだ。

オーケストラ編成は管楽器を欠いているが、4人の打楽器群が多彩なかたちで、様々な音色を作るのが特徴。全体は二つの楽章からなる。

**第1楽章**はまず、ヴァイオリンのモノローグではじまる。やがてそこに三味線が絡みはじめ、冒頭からカデンツァのような雰囲気。しかし、三味線が連打を叩きだすとオーケストラが稼働し、一気に多層的な様相へ。とりわけ弦楽器や独奏ヴァイオリンに、三味線の音型が投射されるというアイディアは鮮やかな効果だ。

**第2楽章**は、一柳流ミニマル音楽。ヴィオラとチェロで執拗に反復される音型に独奏楽器群が絡みあい、さまざまな様態を見せる。後半で突如としてあらわれるのが、打楽器、独奏ヴァイオリン、三味線の各パートが不確定に絡み合う流動的な部分。ここでは東洋と西洋の時間がゆるやかに交錯する。そして終盤。低弦に復活した反復音型のうえで、楽章冒頭がゆるやかに再現され、最後にはついに、二つの独奏楽器は同じリズムで一体化して太く、力強い響きを奏でる。この感動的な終結部こそ、この作曲家がたどりついた結論といってよいだろう。〈沼野雄司 音楽学〉

作曲：2021～22年／初演：2022年10月25日、東京／演奏時間：約18分

楽器編成／打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、シロフォン、ヴィブラフォン、マリンバ）、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏三味線

■一柳 慧 TOSHI ICHIYANAGI — 1933年、神戸市生まれ。日本音楽コンクール作曲部門で第1位受賞（49年、51年）。19歳で渡米、ニューヨークでケージらと前衛的音楽活動を展開。帰国後は偶然性の導入や図形楽譜を用いた作品で、様々な分野に強い影響を与える。紫綬褒章、文化勲章ほか受章多数。

## ドビュッシー イベリア (管弦楽のための〈映像〉から)

「イベリア」は、管弦楽のために書かれた曲集〈映像〉の第2曲だが、20分ほどを要する堂々たる作品ゆえに、独立して演奏されることも多い。タイトル通り、スペインを題材にした音楽である。

もっとも、ドビュッシーは、フランス国境に近いサン・セバスチャンをわずかに一度だけ訪れたことを除けば、スペインに滞在したことはないという。言われてみれば、冒頭の主題、そして楽曲のそここで鳴るカステネットの響きは、いかにも観光的であり、頭の中で考えだしたスペインという気がしなくもない。

しかし、リアリティは薄くとも、音楽は実に魅力的だ。ここにはドビュッシーというフィルターを通した、架空のスペインが間違いなく息づいている。してみると、曲集のタイトル「Image」は「映像」よりも、心象、偶像と訳した方がよいのかもしれない。

全体は三つの部分からなる。

最初は「街より道より」。まずはクラリネットが音楽をリードするが、やがて様々な楽器がそこに絡み合い、さらにタンブリンとカステネットを含んだ打楽器群が導入されると、一気にセビリア風の情緒があふれ出す。時折鋭いリズムで介入してくる弦楽器の重音、中間であられる金管楽器のファンファーレなど、意外なほどに現代的な工夫も楽しい。続く「夜の香り」は、もっともドビュッシーらしい音楽。リズム的要素はほぼ抑えられた中で音色の微細な変化が続くが、後半では、楽曲冒頭のセビリア風旋律が夢のように漂ったりもする。そのまま休みなしで演奏される「祭りの朝」では、いよいよ祭りが始まる。いくぶん楽想が錯綜<sup>さくそう</sup>しているのは、浮き立つ街のざわめきを、さまざまな視点から切り取っているということなのだろう。踊りのリズム、ヴァイオリン独奏と様々な余興が華やかな気分を盛り上げるが、最後のクライマックスに到達した瞬間、いくぶん唐突に曲は閉じられてしまう。この潔さはなんとも洒落た趣向だ。

〈沼野雄司 音楽学〉

作曲：1906～08年／初演：1910年2月20日、パリ、ピエルネ指揮コロヌ管弦楽団／演奏時間：約20分  
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トロンバット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、カステネット、シロフォン、鐘）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

## ヴァレーズ アルカナ

1925年、生地フランスからアメリカに移り住んで10年を迎えたエドガー・ヴァレーズ（1883～1965）は、この新天地において2作目にあたる大規模な管弦楽曲にとりかかった。スケッチを開始した当初、ヴァレーズは妻ルイスにこんな手紙を送っている。

「アルカナ、こんなに厚みがあり、喜ばしい音楽を今まで書いたことがない。力と活気と、そして太陽に満ちた作品。アルカナは今や新しい段階へと進んでいる。（中略）君に言いたいのは、この曲を作曲するのが本当に幸せだということだ」

ヴァレーズにしては珍しく、ひどくポジティブな述懐である。確かに、この楽曲はゴツゴツとした響きが特徴的な前作〈アメリカ〉（1921）に比べて、はるかに洗練された造形を持っているのに加えて、前へ前へと向かうエネルギー的な性格が特徴といえる。

しかし、1927年4月8日の初演はさんざんな酷評を浴びた。「十分な音の恐怖を実現したもの」（ニューヨーク・タイムズ紙）、「不満の声の勃発が、断固とした拍手を上回った」（ザ・サン紙）、「聴衆は、音楽とはほとんど関係なさそうな音の沼地に飛び込むことになった」（ミュージカル・アメリカ誌）等々。全くひどいものだ。では、ここまで強い拒絶感を批評家に与えた〈アルカナ〉とはいかなる作品だろうか。

タイトルの不思議な語感、ルネサンス期の錬金術師パラケルススの著作からの引用で、ラテン語で「奥義・秘儀」といったほどの意味を持つ。さらにヴァレーズはスコアの冒頭に、パラケルススによる、次のような文章を添えている。

「一つの星が、他の全てを超えて高みに存在している。これは予兆の星である。二番目の星は上昇宮。三番目は四大元素をつかさどる星々であり、かくして六つの星が輝いている。そしてさらにもう一つ別の星、想像の星があらわれる。この星はさらに新しい星を生み出し、新しい天国をも生み出すのである」

何やら意味ありげな文章だが、ともかくこのような宇宙的なイメージが楽曲全体の基にあるのだろう。そもそも、その生涯を通じてヴァレーズは常に、古代と未来の双方に極端な形で引き裂かれながら活動をつづけた作曲家だった。パラケルススによる魔術的な文言と、未来的といってよいサウンド、このギャップの中にヴァ

レーズという人の面白さがある。

楽曲は全体で20分ほどの長さを持つ。冒頭であられるのは、低音から湧き上がる11音のモチーフである。強烈なシンコペーションを効かせながら、7拍子→5拍子→7拍子→5拍子→3拍子→5拍子→6拍子という具合に1小節ごとに拍子に変化する様子は、なんとも激烈だ。やがて弦楽器によるヒステリックな副主題があらわれたのち、巨大な打楽器群も加わって、音楽は破壊的な様相を呈することになる。

ちなみに、ストラヴィンスキーは「〈アルカナ〉の中には、私自身をしばしば見出すことができる」とのちに意地悪い口調で述べているのだが、なるほど確かにこの冒頭音型は〈火の鳥〉のクライマックスであられる“魔王カスチエイの踊り”を思い起こさせる。しかし、ティンパニのグリッサンドやライオンズ・ローアといった打楽器の野卑な響きが流線形を描く管弦楽にびたりと調和するとき、あるいは軍楽隊のように鳴らされる木管とシロフォンのアンサンブルが11音モチーフと重ねられて不思議な音調を醸し出すとき、まさにヴァレーズ作品でしかあり得ない硬質の叙情がホールを満たすことになる。

また、この曲できわめて印象的なのは終結部だろう。スコアの最後に至って、ヴァレーズは突如として、調性的に響く悲劇的なファンファーレを置いた。誰もが驚くような場面転換であり、なんとも特異なバランス感覚というほかない。ヴァレーズ研究者のマルコム・マクドナルドは、この最後の部分を、スコア冒頭のパラケルススの文章中にある「他の全てを超えて高みに存在している星」ではないかと述べているが、これは説得力のある意見だ。まさに、音楽はもっとも高い星を描写して幕を閉じるのである。

〈沼野雄司 音楽学〉

作曲：1925～27年／初演：1927年4月8日、フィラデルフィア、レオポルド・ストコフスキー指揮／演奏時間：約20分

楽器編成／フルート2、ピッコロ3、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、ヘッケルフォン、クラリネット2、エスクラリネット2、コントラバスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット2、ホルン8、トランペット5、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、フィールドドラム、ライオンズ・ローア、トライアングル、タンブリン、シンバル、クロテイル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、ムチ、ギロ、木魚、ゴング、鐘、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、ココナッツ）、弦五部

10/29  
土曜マチネー

10/30  
日曜マチネー

Program Notes

## ビゼー

### 〈アルルの女〉第1組曲、第2組曲

アルルの女とはだれか。アルフォンス・ドーデの原作では名前も明かされず、ただ主人公である富農の息子フレデリが夢中になった女性として言及される。役柄を一言でいえば「都会の女」。農村で大切に育てられた純朴な若者が、街で奔放な女に会い、恋に落ちる。しかし女には別に男がいた。絶望したフレデリは幼なじみとの結婚を決意するも、どうしてもアルルの女を忘れられず、発作的に身を投げて命を絶つ。これは救いのない悲劇なのだ。

ジョルジュ・ビゼー（1838～75）は、1872年にパリのヴォードヴィル座で上演された〈アルルの女〉のために劇付随音楽を作曲した。オーケストラの楽員はわずか26名のみという制約があったが、ビゼーは熱意を持って作品に取り組んだ。初演後、ビゼーは劇付随音楽から4曲を選び、フルオーケストラ用に編曲して第1組曲を編む。さらにビゼーの死後、1879年に友人の作曲家エルネスト・ギローの選曲と編曲により第2組曲が作られた。

**第1組曲 第1曲「前奏曲」** プロヴァンス民謡〈3人の王の行列〉が使われている。

サクソフォンの寂しげなソロを挟んだ後、弦楽器が主人公の苦悩を表現する。

**第2曲「メヌエット」** 軽快で典雅な舞曲。

**第3曲「アダージェット」** 甘美で情感豊かな旋律が奏でられる。

**第4曲「カリヨン」** ホルンと弦楽器が教会の鐘の音を表す。

**第2組曲 第1曲「パストラール」** 大らかで牧歌的な主題が鳴り響く。

**第2曲「間奏曲」** 重々しい総奏にサクソフォンによる陰影に富んだ旋律が続く。

**第3曲「メヌエット」** 歌劇「美しきパースの娘」からギローが転用。フルートとハーブの清澄な二重奏は有名。

**第4曲「ファランドール」** 民謡「3人の王の行列」の主題とプロヴァンスの舞曲ファランドールを交替させながら進み、最後は両者が重なって熱狂的なフィナーレを迎える。  
〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1872年／初演：1872年10月1日、パリ（劇付随音楽）／演奏時間：約35分  
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、タンブリン）、ハーブ、弦五部

## ジョリヴェ

### トランペット協奏曲 第2番

アンドレ・ジョリヴェ（1905～74）は画家の父とピアニストの母のもと、パリに生まれた。早くから作曲を始めるも両親の勧めによりいったんは教師となる。しかし、1929年にヴァレーズの〈アメリカ〉を聴いて衝撃を受け、30年から33年までヴァレーズに師事して、師の革新的技法や管弦楽法を学んだ。やがてジョリヴェは呪術的、魔術的な表現を備えた独自の作風を開拓する。

ジョリヴェの創作において協奏曲はもっとも重要なジャンルのひとつだった。1947年のオンド・マルトノ協奏曲、50年のピアノ協奏曲（赤道コンチェルト）らに続き、54年にトランペット協奏曲第2番が作曲された。この作品でなにより目立つのはオーケストラの特異な編成だろう。コントラバス1台を除いて弦楽器が用いられず、サクソフォンを含む管楽器群に多種多様な打楽器群、ハーブ、ピアノが加わる。一方、独奏トランペットはミュート（弱音器）を駆使しながら、高音域を中心に多彩な表現を繰り出す。初演時の独奏者レイモン・トルネサックが技術的な難度について口にする、ジョリヴェは「でもルイ・アームストロングは高音域で見事な演奏をしているじゃないか。どうしてクラシックの奏者にできない？」と語って励ましたという。

**第1楽章** メスト ミュートを用いたトランペットの妖しいソロで開始され、野性的なリズムによるエキゾチックなダンスが続く。

**第2楽章** グラーヴェ けだるいムードで奏でられるマイルス・デイヴィス風味の夜想曲。初演者はジョリヴェから「ブッチーニのように歌ってほしい」と求められた。

**第3楽章** ジョコーソ コミカルな主題が乾いたユーモアを醸し出す。秘境の奇祭のような謎めいた熱狂が訪れる。作曲者によればシャブリエへのオマージュ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1954年／初演：1956年9月5日、ヴィシー／演奏時間：約13分  
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、コントラファゴット、アルトサクソフォン、テナーサクソフォン、トロンボーン、打楽器（大太鼓、小太鼓、テナー・ドラム、木魚、ウッドブロック、スレイベル、トムトム、銅鑼、サスペンデッド・シンバル、クロティール）、ハーブ、ピアノ、コントラバス、独奏トランペット

10/29  
土曜マチネー

10/30  
日曜マチネー

Program Notes

10/29  
土曜マチネー

10/30  
日曜マチネー

Program Notes

## フローラン・シュミット バレエ音楽〈サロメの悲劇〉 作品50

ユダヤの王女サロメを題材とした音楽作品といえばリヒャルト・シュトラウスのオペラがまっさきに思い出されるが、シュトラウスが用いたのはオスカー・ワイルドの戯曲。一方、フランスの作曲家フローラン・シュミット(1870~1958)の〈サロメの悲劇〉は、新約聖書をもとにロベール・デュミエールが作り上げた詩にもとづいている。したがってワイルドの戯曲のような、サロメが預言者ヨハネ(ヨカナーン)の生首に接吻する場面はない。代わってヘロデ王が養女サロメに向ける欲望と、ヨハネの斬首により引き起こされる天災に焦点が当てられる。

〈サロメの悲劇〉はまず1907年にモダンダンサーのロイ・フラーによる默劇のための付随音楽として、小編成のオーケストラ用に作曲された。その後、10年にバレエ・リュスの主宰者ディアギレフの発案で大編成のバレエ音楽に書き改められ、13年にボリス・ロマノフの振付、タマーラ・カルサヴィナの主演により上演された。曲はストラヴィンスキーに献呈されている。

**第1部「前奏曲」** 死海を見下ろすヘロデ王の宮殿のテラス。イングリッシュ・ホルンが異国風の主題を奏でる。山々が夕日に赤く染まる。「真珠の踊り」スケルツォ風の活発な曲調に変わる。ヘロデの妻ヘロディアスが宝石箱から首飾りやヴェールを取り出す。サロメが現れて身を飾り、子供のように喜んで踊り出す。

**第2部「海の誘惑」** 暗闇が訪れ、海に妖しい光が輝く。オーボエが死海の深みから聞こえる声を表現する。ヘロデは声に聞き入り、サロメは踊る。「稲妻の踊り」稲妻がサロメの姿を照らす。ヘロデはサロメを追いかける。ヴェールが剥がされ、サロメは一瞬裸になるが、ヨハネがマントで覆い隠す。ヘロデは怒り、ヨハネの斬首を命じる。サロメは恐怖に襲われ、ヨハネの首が載った盆を海に投げ入れる。「恐怖の踊り」竜巻と雷が宮殿を襲い、山が噴火して炎に包まれる。

(飯尾洋一 音楽ライター)

作曲：1907~10年／初演：1913年6月12日、パリ、シャンゼリゼ劇場／演奏時間：約29分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、グロッケンシュピール)、ハープ2、チェレスタ、弦五部